

特集

福島から考える協同の意味 —今ある困難から再生を目指して—

2012年6月30日(土)、第22回協同総研総会を福島大学にて開催した。開催にともない、福島大学ならびに諸先生方の多大なご協力をいただき実現した総会である。

「ふくしま」の抱える困難をできるだけ多くの会員と共有し、問題解決に取り組めたらと企画したものであったが、総勢57名もの会員の皆様にご参加いただき、協同総研の今期研究活動方針の確認を行った。今期は従来より取り組んできた協同労働の法制化活動や共生社会の実現へ向けた諸研究活動、「食・農・環境」事業と第6次産業分野における協同労働の研究などに加えて、3.11以降の日本社会のあり方をテーマに、脱原発とともに自然再生エネルギーと協同組合および協同労働の可能性、被災地東北の復興、特に福島の困難な課題解決と東北各地の森林活用を視野にした研究活動を議案として提案した。

また、来期に一般社団法人格取得を目指すべく、提案をおこなった。新しい時代と法制化実現後の活動展開を視野に一般社団法人への移行に向けてこれまで定款策定の検討などを行ってきたが、今期1年を掛け、現在のみなし法人から一般社団法人へ移行することなど、すべての提案議案を会員257名からの委任と満場一致をもって承認がされた。提案内容等に関しては来月242号にて掲載のためそちらをご覧ください。

午前中の総会に引き続き、午後からは総会記念フォーラムを開催、第1部基調講演では小山良太氏(福島大学准教授)に「放射能汚染から食と農の再生」と題して、3.11以降の福島における放射能問題に対峙してきた実践と研究の報告をいただいた。第2部のパネルディスカッションでは、東日本大震災と福島第1原子力発電所事故により甚大な被害を被り、1年3ヵ月余を経てなおつらいなかにある福島の人びとの現状を、さまざまな立場の方々からご報告いただいた。

福島第1原発事故と震災被災により福島の人たちが置かれた困難な問題に関しては、意見を戦わせ合意を得るといふより、多様な考えや価値観を認め合い、一つひとつの課題を解決していくことが求められているのではないかと、このフォーラムを開催するにあたり私たちも構成を組み立ててきた。どこに優先順位を置くかはそれぞれの置かれた立場によって異なる。なにを優先し、なにを守るのか。福島の人びとはこうした選択を常に迫られ続けている。

放射能の問題は、ともすると異なる価値観を対立に変え、人びとの暮らしを、地域を、家族を分断してしまう。また、一方的な避難の線引きや巨大な金額が投下された助成、補償、除染費用などは、今までのコミュニティの調整能力をゆがめる他動的な要素となっている。まずは人びとが抱えている苦しい思いと現状を互いに知り、互いの選択を認め合うことから、福島の再生に向けた連携と協同をつくっていくことはできないだろうか？そしてなにより、生きるための日々の食物や電力エネルギーのほとんどを地方に依存して日常生活を送っている首都圏に住む私たちこそが、この福島の問題を当事者性をもって考えてなくてはいけないのではという想いから、今回のフォーラムを開催した。

当日ご参加いただけなかった会員の皆さまにも本誌を通じて、これからの日本社会のあり方を考える契機の一つとしても、福島への関わりを模索していただければ幸いです。(編集部)

第22回 協同総合研究所総会記念フォーラム & 2012東北協同集会inふくしま

福島から考える協同の意味 —今ある困難から再生を目指して—



2012年6月30日(土)、福島大学において第22回協同総研総会記念フォーラムを開催し、全国から122名の方が参加した。

第1部の基調講演では「放射能汚染から食と農の再生」と題し、小山良太氏(福島大学准教授)に3.11以降の福島における深刻な放射能問題についてチェルノブイリ事故以降の海外の取組み事例を対比させて具体的な提起を含め報告いただいた。

第2部パネルディスカッションでは、福島の人びとの現状を、さまざまな立場の方々、有機農業者、水産加工業者、県外避難中のお母さん、学生、大学や協同組合陣営、福島で仕事おこしに取組むワーカーズコープから報告をいただき、また、その他に会場からも県内の障がい者就労生活支援団体や県外からの支援団体の取組み等も発言をいただいた。